令和3（2021）年度
堺アーツカウンシル
活動報告書

2021
ACTIVITY
REPORT
SAKAI
ARTS COUNCIL

目次

はじめに―プログラム・ディレクターからのごあいさつ― 3
堺アーツカウンシルについて 4
堺市の文化芸術関係図 5

堺アーツカウンシル令和3年度活動総括 7

堺市文化芸術活動応援補助金について 9
令和3年度採択事業紹介 10

文化芸術活動に関する相談受付・事業視察 20
勉強会の開催 22
広報 23
調査業務 23

座談会―令和3年度の活動を振り返って― 24

はじめに―プログラム・ディレクターからのごあいさつ―

撮影：成田舞

堺アーツカウンシル　プログラム・ディレクター

上田 假奈代

堺の街に足を踏み入れると、タイムスリップした気持ちになることがあります。

木々の緑に囲まれたいくつもの古墳、南蛮の船も行き交った港や川、自由・自治都市として自立した街で、人々は悲喜交々に暮らしていたのでしょう。

堺の街で繰り広げられる文化芸術が人々の交流を生み出したことは、昔もいまも変わりません。

令和3年1月に発足した堺アーツカウンシルは、堺の街で文化芸術がきっかけとなり、さまざまな人たちのつながりが生まれることをめざしています。

例えば、つながりから対話が生まれ、地域やコミュニティで気になることにともに取り組む仲間が増えていくような。また、楽しみを共有することが出かける理由となって、孤立を防ぐような。

それらは数値化の難しいことですが、数字が見えることは見えやすくし、いくつかの取組を具体的に紹介することから、堺の街で繰り広げられる文化芸術活動の今を編んでゆきましょう。

コロナ禍にあった令和3年度は、不確実な状況のなか事業者は決断を迫られ、事業の延期や中止もありました。見通しも厳しい年でした。そうしたなかで積まれた経験をこれからの活動にいかし、堺アーツカウンシルもみなさんとともに、新しい扉を開けていきたいと思います。

令和4年（2022年）　秋

堺アーツカウンシルについて

堺アーツカウンシルとは

専門知識を有する人材が、文化芸術に携わる人たちを支援することで文化芸術の振興を図り、文化芸術を活用して子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化といった様々な分野の社会的課題の解決をめざす組織で、令和3年1月に設立しました。

文化芸術に関する専門知識を有するプログラム・ディレクター（PD）とプログラム・オフィサー（PO）を中心として、堺市文化芸術審議会、堺市文化課で構成されています。

主な活動内容

○補助金申請・活動サポート
○文化芸術活動に関する相談受付及び視察
○勉強会・交流会の開催
○広報活動
○調査研究

プログラム・ディレクター（PD）、プログラム・オフィサー（PO）の紹介

プログラム・ディレクター（PD）

上田 假奈代（詩人・詩業家）
専門分野：ことば、存在の表現
1969年奈良県吉野生まれ。「ことばを人生の味方に」、2003年大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアートNPO「ココルーム」を立ち上げ、2008年西成・釜ヶ崎に移転。2012年まちを大学に見立てた「釜ヶ崎芸術大学」、2016年ゲストハウス開業。

プログラム・オフィサー（PO）

柿塚 拓真（アートマネージャー）
専門分野：音楽マネジメント、芸術団体運営
日本センチュリー交響楽団等で音楽事業制作に従事。国際交流基金アジアフェローシップ、アジア各地や英国の団体との共同事業など海外団体との事業も手掛ける。現在、（公財）神戸市民文化振興財団演奏担当課長として神戸市室内管弦楽団/混声合唱団に勤務。

川那辺 香乃（アートコーディネーター）
専門分野：アートプロジェクト、ファシリテーション、身体表現
普段は教育現場でアートのワークショップコーディネートを行う。廃校を活用したアートプロジェクト、社会課題をテーマにしたワークショップ、障がい者とともに表現を模索する研究会などにも携わる。最近はアートプロジェクトの全国ネットワークづくりにも奔走中。

中脇 健児（ファシリテーター）
専門分野：コミュニティデザイン、ワークショップ、ソーシャリー・エンゲイジド・アート
“その場にいる人とその場だからできるコトを考える”「場とコトLAB」を立ち上げる。伊丹市文化振興財団に14年間所属。領域はアート、コミュニティプログラム、地場産業支援、教育、福祉、ファシリテーションやワークショップの専門家育成など。NPO法人こととふラボ理事。大阪芸術大学 芸術計画学科准教授。

宮浦 宜子（食卓ディレクター）
専門分野：教育、地域コミュニティ、食
教育現場や地域コミュニティでのアートマネジメントに携わった後、出会いと交流の場としての「食卓」にアートとの共通性を感じ、ワークショップの企画や執筆活動などを行う。近年、北海道から関西に移住。特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち理事。

大澤 寅雄（文化生態観察）　※令和4年度就任
専門分野：文化政策、アートマネジメント
1970年滋賀県生まれ。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。地域文化を生態系として観察する「文化生態観察」を実践中。株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室主任研究員、NPO法人アートNPOリンク理事長。

堺市の文化芸術関係図

事業者・市民等

利用・事業参加・相談

活動支援

相談

活動支援

事業参加

活動支援

公益財団法人 堺市文化振興財団

指導・調整

堺アーツカウンシル

SAKAI ARTS COUNCIL

堺市文化芸術審議会

堺市文化課

PD（プログラム・ディレクター）

PO（プログラム・オフィサー）

所管

文化施設（文化課所管）

© 石川拓也

フェニーチェ堺

文化館

連携

連携

中枢文化施設

地域文化芸術関連施設

梅文化会館

東文化会館

西文化会館

美原文化会館

文化施設（他課所管）

博物館

さかい利晶の杜

中文化会館

サンスクエア堺

みはら歴史博物館

堺アーツカウンシル令和3年度活動総括

令和3年度は、プログラム・ディレクター（PD）1名、プログラム・オフィサー（PO）4名の体制で、相談受付、事業視察、調査研究、情報発信という活動を通じて、文化芸術に携わる人たちを支援することにより、文化芸術の振興、文化芸術を活用した社会的課題の解決につながる取組を行いました。

①相談受付

令和3年度の文化芸術活動に関するのべ相談件数は42件（相談者の実数は34件で再来の相談が8件）でした。42件のうち、市内の活動の相談が36件で、補助金に関する相談が35件となりました。相談が多かった時期は11月と12月で、11月下旬に行った補助金説明会のあとに相談が集中しました。補助金の申請書の書き方に関する相談やコロナ禍での事業内容の変更に関する相談が多くを占めました。

②事業視察

令和3年度の文化芸術活動に関するのべ視察件数は41件（訪問先の事業者の実数は27件、訪問先1件に複数のPD・POの視察や再訪が14件）でした。41件のうち市内の視察が39件で、補助金の採択事業の視察が27件となりました。公演や展覧会などの事業本番の視察がのべ30件で、本番以外の準備・リハーサル、練習、会議・打合せの視察や、ヒアリングのための訪問も行いました。視察を行った補助金採択事業の中で最も多いのは地域文化力向上事業でした。

③情報発信

地域でのアート活動について分かりやすく学び交流することを目的に、地域で勉強会を2回実施しました。のべ参加者数は41名でした。

④調査研究

当年度の採択事業の来場者・参加者に対するアンケート調査では887件の回答がありました。来場者・参加者の総合的な満足度で「たいへん満足」、「まあ満足」と回答した割合は97.5%、堺アーツカウンシルの目的について「ぜひやってほしい」、「まあやってほしい」という肯定的な期待を寄せた回答が84.5%となっています。調査の結果から、来場者・参加者の過半数を高齢者が占めていることや、文化芸術の活動の場や市民の参加機会に地域による差があることが明らかとなりました。

令和3年度は本格的な活動の初年度であったため、対前年度比のように相対化できる比較対象を挙げて事業の結果（アウトプット）を評価することはできませんでしたが、事業の成果（アウトカム）としては以下のような点を挙げることができます。

- 令和３年度に始動した**堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談を積極的に受け入れ**、募集要項に基づく情報の提供だけでなく、申請書の書き方や採択後の活動の進め方など、**PD、POの専門性を活かした丁寧な助言を行った**。
- 補助金の採択事業を含め、堺市内における文化芸術活動について、今後の活動サポートの一助とすべく積極的に**視察を行った**。視察では、**地域の文化芸術活動の現場を直接訪問してヒアリングを行うなど**、堺アーツカウンシルとして**主体的・能動的に活動の実態を把握した**。
- アンケート調査では、**採択事業の来場者・参加者の高い満足度**と、**堺アーツカウンシルに対する肯定的な期待を確認**した。また、勉強会を開催することで、**地域の文化芸術活動に携わる個人や団体との双方向の交流の機会を創出**した。

前述の成果は、「第2期堺文化芸術推進計画」で、**前期計画では「市民文化活動を促進する環境が実現できたとは言い難い状況」と指摘されていた課題に対する直接的な取組み**でもあり（取組の詳細は「文化芸術活動に関する相談受付・事業視察」（P.20）、「勉強会の開催」（P.22）、「広報」（P.23）を参照）、**堺市内で文化芸術活動を行う個人や団体の、新たな発掘と育成、ネットワークの構築、多様な分野との連携を促しています**。

より具体的な成果を挙げると、第2期計画において、**前期計画における重点的方向性のひとつである「次代を担う子どもたちを対象とした文化芸術活動の充実」が「十分に実現できていたとは言い難い状況」**だと指摘されていました。令和3年度補助金では、**子どもたちを対象とした数多くの活動が採択事業となり、堺ACも一部事業の実施に関与しました**（取組の詳細は「令和3年度採択事業紹介」（P.10）。）採択事業での来場者・参加者に対するアンケート調査（児童用調査票を含む）によると、**17.7%の回答者が「19歳以下」**で、**児童用調査票**（141件）の**平均年齢7.7歳、総合的な満足度**（「満足した」と回答した割合）は**92.9%**となっています。**これらの数値から、堺ACの活動が、未来の文化芸術を担う子どもたちへの文化芸術に触れる場の提供**にもつながっています。

文化芸術活動に関する
相談件数
のべ42件

文化芸術活動の
視察件数
のべ41件

文化芸術を活用した
社会的課題の解決について
「ぜひやってほしい」
68.4%

文化芸術活動の情報発信
勉強会
のべ41人参加

堺市文化芸術活動応援補助金について

堺市文化芸術活動応援補助金とは

堺市文化芸術活動応援補助金は、歴史ある堺の文化を継承し、市民の文化活動の振興を図り、地域文化の創造に努め、また、文化芸術の力を活用して、子育て、教育、福祉、観光、都市の活性化等の幅広い分野における社会的課題の解決に資する事業の実施に要する経費を市が補助することにより、自由で心豊かな市民生活の実現及び都市魅力の創造に寄与することを目的として令和3年に創設した補助金です。

より効果的な事業実施をめざして、堺アーツカウンシルが申請時の事業の組み立てについての相談受付や事業の視察、事業実施の際の伴走支援を行っています。

次頁以降で、堺アーツカウンシルが実際に視察した令和3年度採択事業の一部をご紹介します。

補助金の区分

	一般補助		特別補助		
区　　分	スタートアップ支援	地域文化力向上	市民文化活動推進	共生社会推進	舞台芸術創造発信
目　　的	地域文化力の向上		市内全域での文化力の向上、社会的課題の解決		
補助上限額	10万円	50万円	100万円	100万円	300万円
対象活動内容	地域における小規模な文化芸術活動	地域における文化芸術の現状を踏まえた地域一体となった事業	市民が身近に文化芸術に触れる機会を提供する事業	共生社会を推進するための社会包摂型事業	質の高い芸術文化に触れる機会を市民に提供し、市民満足度の向上及び都市魅力の創出に寄与する事業
補　助　率	補助対象経費の1/2以内				

令和3年度申請・採択件数

	一般補助		特別補助			合計
申請区分	スタートアップ支援	地域文化力向上	市民文化活動推進	共生社会推進	舞台芸術創造発信	
申請件数	19件	38件	11件	4件	10件	82件
採択件数	12件	20件	3件	3件	3件	41件
採択金額	924,000円	6,853,000円	2,002,000円	2,166,000円	5,988,000円	17,933,000円

令和3年度採択事業紹介

スタートアップ支援

アートを通じた、福祉・自然・伝統の体験

事業者 アトリエEDDY&BOBIN

事業名 トールペイント・絵画・造形展示会と子供たちのボランティア参加

日程・会場 【作品展示会】令和3年7月11日 大小路五間　【子どもたちの絵画制作補助ボランティア】7月27日 モンキーばなな作業所、8月6日 サニー・ばなな作業所、12月27日　サニー・ばなな作業所、令和4年3月25日 モンキーバナナ作業所、【ワークショップ（屋外）】8月17日、11月3日 コーチング事務所SALT、【ワークショップ（屋内）】12月11日 大小路五間

子どもたちの絵画制作補助ボランティア

概　要

【作品展示会】

堺市在住の子ども31名による絵画展示会。「絵画展示会を通じた地域の方々との交流」がテーマ。来場者のべ94名。

【子どもたちの絵画制作補助ボランティア】

堺市内の就労継続支援B型作業所にて4回実施。参加者のべ17名。

【ワークショップ】

屋外のワークショップでは、南区で自然観察を行い、絵画や玉ねぎの皮で染めた布を使ったバンダナ制作、ススキを材料にした作品制作を行った。屋内のワークショップでは、着付け体験と古着の布を利用したフォトフレームの制作を行った。参加者のべ35名。

執筆者所感

多彩な事業を展開しておられるなかで、私は12月の絵画制作補助ボランティアを見学しました。会場のサニー・ばなな作業所は中区の住宅街のなかにあります。その日はカレンダーを吊るすためのボードづくりをされていました。あらかじめたくさんの画材が用意され、参加者は自分の作品イメージにあわせて絵の具や型を選んでいきます。1人の参加者につきっきりで創作のサポートをする子どももいれば、困っている人がいたらそっと近づいて、絵の具が使いやすいように無言でボードを押さえたり、スタッフの方と一緒に作品をドライヤーで乾かしたりする子どももいました。スタッフからのアドバイスはとくになく、それぞれが自分のペースで参加者との距離を縮めているように感じました。

主宰の方にお話をお伺いすると、子どもたちからはこの体験の直後ではなく、しばらく経ってからじわじわと感想がでてくるのだそうです。「子ども自身はこの体験をボランティアではなく、一緒に作品をつくったと思っている。今後も障がいのある人と関わることが当たり前と感じられるような機会をつくっていきたい」とおっしゃっていました。（川那辺PO）

スタートアップ支援

子どもたちが性別問わず、浴衣の着付けをマスターし、茶道を知る

事業者 堺市中区伝統文化和装礼法親子教室実行委員会

事業名 キッズや初心者のための茶道&自分で着る浴衣体験

日　程 令和3年7月21日、28日、8月4日　午前の部（10:00～12:00）午後の部（13:00～15:00）

会　場 堺市立青少年センター

着付けをして、落ち着いてお茶をいただく

概　要 小中学生が浴衣の着付けや畳み方を学び、浴衣姿で茶道の説明をうけ、実際に盆点前を体験。参加者のべ30人。（3日間通しのため合計10人）

執筆者所感

蝉の鳴き声だけが響く公園の横にある青少年センターの一室では、数名の子どもたちが浴衣の着付けを学んでいます。紹（そ）の着物を着た大人の先生が3人、それぞれの習熟度に合わせ、難しいところは何度か繰り返すよう声をかけています。なかに男子学生がいて、参加の動機を尋ねたところ、「茶道に興味があったから」。女子学生は「日舞を習いはじめ、浴衣の着付けに興味があったから」。部屋を変えて、茶道の体験では、緊張しながらもお菓子を食べ、お抹茶を味わい、先生からの「感謝の気持ちがいちばん大事ですよ」の言葉にうなずきます。2時間、子どもたちの集中力がとぎれることはありませんでした。

保護者の方に話を聞いてみると、家族以外の大人に出会うこと、家庭ではできない体験ができたことが嬉しいという感想でした。終了後に、主催者が懐紙で小銭入れの作り方を教えると、今回はじめて会った子ども同士で教え合い、打ち解けて遊び始めた様子も印象深いです。

事業の前に広報の相談にお見えになったときに、性別問わず参加してほしい、ということから、チラシにその旨の記載をすすめたところ、実際に男の子も参加がありました。堺茶の湯まちづくり条例を実践するような夏休みの取組といえましょう。（上田PD）

スタートアップ支援

木管アンサンブルの魅力と広がる世界

事業者 南大阪Gomoku倶楽部

事業名 第二回演奏会

日　程 令和4年3月6日　13:30～15:10

会　場 フェニーチェ堺大スタジオ

お茶の間クラシックのような和やかな雰囲気

概　要 フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、バソン、ピアノの6人編成。フィガロの結婚序曲、エンジェルスラダーなどの演奏、楽器紹介など行う。堺市内の児童生徒を招待する予定だったが、まん延防止等重点措置期間中のため来場は叶わず。来場者106人（堺市内25人）

執筆者所感

フェニーチェ堺の大スタジオの壁は本の背表紙が並んでいるように見え、薄暗い本の森のなかに入ったような気持ちになります。パンフレットは親しみやすい話し言葉で綴られ、音楽を敷居の高いものではなく身近なものとして捉えてほしいという主催者の気持ちが感じられます。

さて、コンサートが始まりました。ピアノと木管楽器5人の珍しい編成です。それぞれの奏者が曲紹介や楽器の説明をしながらコンサートは進みます。ホルンの紹介ではホースと漏斗が登場。これはホルン。ぼわーん、と音がなり、童謡が演奏されました。フルートは年代を経るほど長くなったそうです。古いほど短い。どんどん分割して石器時代まで遡った音を聴きます。風をきるような音です。選曲は親しみやすい曲から創作曲まで幅広く、客席はお茶の間にいるような気分になりました。

コロナ禍のため、奏者は演奏以外マスクをします。演奏した後にマスクをして話すのは苦しいそうで、息があがる、とこぼしていました。また、もともとは吹奏楽を学ぶ小中高生を招待する予定でしたが、コロナ禍のため実現しませんでした。もしここに吹奏楽に取り組む若い人たちがいたら、どんな反応や影響があったのか興味は尽きません。会場には100人ほどの観客がいましたが、初めてフェニーチェ堺を訪れた人もいたそうです。（上田PD）

地域文化力向上

地域に焦点をあてた公募美術展の取組

事業者 北堅吉彦

事業名 平尾百景展

日　程 令和4年3月26日～28日

会　場 平尾会館2階

子どもからお年寄りまで多世代の人々が訪れた

概　要

「身近な平尾の風景を題材にした作品だからこそ、描く人も観る人も新しい発見ができるのでは－」こうした意図のもと、長年平尾で絵画教室を運営する市民によって企画された公募美術展。出展者58人。同作者によって制作された平尾小学校区内風景を題材とした作品と自由作品が並ぶ。来場者のべ397人。アンケート（回収率55%）によると、来場者は区内在住者が6割以上、幼児から90歳代までの多様な世代。

執筆者所感

会場は平尾地区を見渡せる公民館。空間を区切る展示壁に、各出展者の平尾百景と自由作品が上下に配置されています。上段を横に観ていけば地域を題材としたテーマ展、上下で観ると小さな個展の集合に見えます。作品にはそれぞれにあわせた額装も施されています。

視察時、会場には途切れることなく人々が訪れ、思い思いに作品を楽しんでいました。来場者は3日間で約400人、アンケートで感想を寄せた人は200人近くにのぼりました。感想は「美術の素晴らしさを感じることができた」、「長年暮らしていて初めて平尾の美しさに気づいた」、「みんなの心にある平尾は素敵なところだと思い、住みたくなった」、「幅広い世代の方の視野と感覚に触れられたような気がした」など多様。多くの言葉が寄せられたのは、美術作家でもある主催者の展示技術によって企画意図や作品の魅力が伝わったことが大きいと感じました。

堺アーツカウンシルは、実施前のヒアリングにおいて、同展が単なる美術展ではなく、失われゆく地域の風景を残す貴重な機会でもあると伝え、しっかりとした記録を残すよう助言しました。本事業は、地域に焦点を当てた企画が、テーマ設定や展示設計を丁寧に行うことによって、市民により身近なものになることを示す取組と言えるでしょう。（宮浦PO）

地域文化力向上

伝統工芸をコミュニケーションのきっかけに

事業者 磐城流つまみ絵朱千会

事業名 第14回朱千会　磐城流つまみ絵展

日　程 **【展示会】**令和3年7月21日～25日　**【ワークショップ】**令和3年7月22日～24日

会　場 堺市立文化館　2階ギャラリー

テーマに沿って作られた作品を熱心に鑑賞する来場者

概　要

【展示会】

朱千会会員と指導者37人で200作品展示。来場数は約600人

【ワークショップ】

つまみ絵をミニ色紙に制作し、互いに鑑賞し対話する。各回1時間半、5回実施。参加者数14人

執筆者所感

JR堺市駅そばの堺市立文化館での展覧会。いつも3年に一度開催する展覧会ですが、令和2年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施できず、4年ぶりの展覧会です。会場には糸と布による色とりどりの作品が並んでいます。朱千会会員のほとんどは女性で、会のピーク時は80人ほどいた会員がいまは40人ほど、高齢の方が多いのも特徴とのことでした。作品を作るだけでなく、コミュニティとしての場でもあることを主宰者はよく理解されていて、会員さんたちの居場所としても機能しているようです。

つまみ細工は手芸と思われがちですが、日本の伝統工芸です。子どもに人気のアニメを作品化した現代風なもの、古典的なものも見受けられます。4つの技法を組み合わせ、非常に細かい手作業によって制作します。ちいさな花ひとつ、制作には一時間以上かかるそう。1000年以上続いた理由は、人の集中力の美しさなのかもしれません。ちなみに、舞妓のかんざしなどもつまみ細工で男性の職人が作るものですが、この会では、各人が自分の世界観を表す平面や立体作品を作ります。美術への造詣の深い主宰者がそれぞれの作品にあわせて背景に彩色や染色なども手がけられ、完成度が高くなっています。主宰者のつまみ細工への情熱がこの会を支えていると感じました。

会場では、若い人が作品を大きなカメラで撮影していました。受付係の若い女性二人に声をかけると、誘われて手伝っていた高校生でした。初めて見たつまみ絵に「きれいです」と声をはずませていました。補助金を活用して、若い人にアルバイトに来てもらったり、撮影した写真をネットにアップしてもらうなどして、若い人たちに知られるきっかけを作ろうとする展覧会でした。（上田PD）

地域文化力向上

さまざまな楽器演奏で、日常とは違った変化のある時間を

事業者 鳳フルートアンサンブル

事業名 おいでやす!堺で!!　楽楽フェスティバル♪

日　程　令和4年3月12日　13:30～15:45

会　場　フェニーチェ堺　小ホール

お揃いの衣装で全員で演奏するフィナーレ

概　要　コーラス、フルートアンサンブル、オカリナ、マンドリンアンサンブルなどの演奏と、8団体合同の演奏も加えたコンサート。参加者71人、来場者80～90人

執筆者所感

主催者の挨拶、司会者によるグループ紹介や曲紹介がとても丁寧に行われ、コンサートへの想いがよく伝わってきました。コロナ禍で練習もままならない中、開催をとても悩まれたそうです。けれど本補助金の採択を受けたことにも背中を押され、客席数を半分にして開催されました。

観客は参加無料。親しみやすい選曲―例えば、フルートでの「吉宗評判記　暴れん坊将軍」、「大きな古時計」など、客席でも口ずさんでいたり、からだを揺らしている姿もありました。音楽を通して人生を楽しむことを呼びかけているコンサートでした。出演者は60歳代、70歳代の女性が多い印象。オカリナのグループは赤いロングドレスの女性たち。杖をついた指揮者は指揮棒だけでなくオカリナを持ち、柔らかな音が場内を包みました。合唱や演奏などの集まりを持つことが、心身の健康によい影響を与えていることが想像されます。コロナ禍で鬱々とした気持ちが発表の機会を持つことで一新できた、という声もあったそうです。

発表という目標があることで、グループ間でのコミュニケーションを大事にされたということでした。ただ、メールでのやりとりが難しいグループもあったそうで、今後のコミュニケーションツールの使い方が改善点としてあげられました。(上田PD)

地域文化力向上

7日間で子どもの可能性を引き出し、オペラの舞台に

事業者 堺シティオペラ一般社団法人

事業名 夏休み Kid's Club 2021

日　程　令和3年7月26日～8月1日　10:00～12:00

会　場　エタニティエイト

本番の衣装を身に着けていきいき練習する子どもたち

概　要　6日間でリズム運動、声の出し方など、またオペラ「ヘンゼルとグレーテル」を題材にイメージを膨らませ、最終日に衣装を身につけ舞台セットの前で指揮者を見ながら歌い演技をおこなう発表会を実施。受講者16人(6歳6人、7歳2人、8歳4人、10歳2人、11歳1人、12歳1人)、オペラ発表会観客36人

執筆者所感

最終日の練習とオペラ発表会の視察に伺いました。低学年の子どもが多く、それほど馴染みのない歌を人前でひとり歌う勇気に拍手が起こります。コロナ禍での開催のため、観客の人数には制限がもうけられていましたが、あたたかい拍手に会場は笑顔につつまれていました。

コロナ禍で、大きな声を出してはいけない、マスク着用という生活様式の影響から、最初は声が出ない子どもが多かったそうです。年長の子どもが年下の子どもを助けるなどしてコミュニケーションが図られ、日毎に協調性や連帯感が高まりました。

6日間はリズム運動、音楽に合わせた身体運動によって表現する基礎的な感覚を養い、発声体験は年齢に応じた伝え方で遠くまで響く美しい声をめざしました。

オペラの名作フンパーディンク作曲「ヘンゼルとグレーテル」に、和の演出を加えたことで、どこにもないオペラが生み出されました。子どもにとっても、日本の伝統的な文化を学ぶ機会、文化が混ざりあうことの面白さを学ぶ取組となりました。

また、受講者のほとんどが9月4日のウェスティミラクル「ヘンゼルとグレーテル」公演に児童合唱として参加するなど、事業者の活動の広がりに連動する取組となりました。今後もさらに活動を発信し、地域に開かれたオペラを期待します。(上田PD)

地域文化力向上

主催も観客も顔が見えている公演事業の一例

事業者 御池台校区連合自治会

事業名 住み慣れたまちで、どんな人も文化芸術を楽しむ×自治会活動

日程・会場

【第9回みいけ寄席】令和3年11月28日　御池台地域会館
【第8回御池台音楽会】令和4年1月30日　御池台こども園
【第9回御池台音楽会】令和4年2月27日　御池台地域会館

子ども園の窓の向こうの木々をバックに室内楽のひととき

概　要

活動が盛んな自治会が活動の一環として住民が来場しやすい地域内の施設で文化と芸術に触れる機会を、と継続的に開催。令和3年度は、落語会（笑福亭學光、露の眞、桂鞠輔、桂おとめ）、テレマンアンサンブルによる室内楽演奏会、堺市出身の音楽家（大守真央、中川知保、坂茉莉江）によるピアノとヴァイオリンの演奏会を実施。入場料はいずれも1,500円と安価に抑えている。それぞれ、第9回みいけ寄席65人、第8回御池台音楽会87人、第9回御池台音楽会50人が来場。

執筆者所感

南区の御池台校区連合自治会は大変活動が活発な自治会で、夏祭り、防災研修、子ども食堂等の定期的、継続的な行事の開催、新聞（好きやねん御池台ニュース）、ブログ、SNSでの情報発信、他自治会の視察や大学、研究の受け入れをしています。その中で文化活動、芸術活動も活動の中心と捉え、継続的に事業を主催。

特に高齢化が進む地域で堺市中心や大阪市まで出かけるのでなく、身近な地域内で水準の高いものを提供したいという意思があります。また事業内容や結果から継続的な開催が自治会に主催者としての経験、ノウハウを蓄積させていることが読み取れます。令和3年度は3事業で180人の来場者を想定していましたが、それを上回る202人の来場者があったことも主催者としての底力を感じます。来場者のうち60代が20%、70代以上が68%、また車いすでの来場もサポートされたとのことで、住み慣れた場所での開催という目的に沿った結果になっているようです。

場所といえば自治会の地域会館に加え地域のこども園とも協力し、会場に使用していることは自治会の活動範囲の広さを示しており、実際に子育てを終え時間が経った住民も改めて地域のこども園のこと、子育てのこと、子どものことを意識する機会にも影響があるのではと想像します。（柿塚PO）

市民文化活動推進

江戸時代に書かれた堺に伝わる「沙界怪談実記」から着想した現代の妖怪芸術

事業者 濱田さち

事業名 沙界妖怪芸術祭

日程・会場

【沙界怪談会】令和3年12月3日　開口神社 瑞祥閣
【沙界妖怪芸術祭】12月4日、5日　開口神社境内・瑞祥閣、山之口商店街
【展示会「鋼と妖怪展」】12月4日～8日　山之口商店街 ギャラリー紙cafe

開口神社に集合する妖怪たち、道ゆく人を異世界に呼び込む

概　要

堺市内外から妖怪ファンやアーティストを呼び込み、商店街のにぎわいなど地域活性化につなげる。
沙界怪談会（落語、怪談、講談）30人
沙界妖怪芸術祭（「沙界怪談実記」パネル展と読み聞かせ、書道ライブや演舞、絵本読み聞かせ、コンテンポラリーダンス、切り絵パフォーマンス、切り絵やお面づくり、かるたなどのワークショップ、妖怪行列パレード）：入場券購入491人、妖怪行列一般参加者42人、妖怪アートフリーマーケット出店者のべ106人、その他招待約15人、山之口商店街や開口神社境内の見物人は多数
展示会「鋼（はがね）と妖怪展」：公募参加作家4人、来場者117人

執筆者所感

妖怪人気は幅広く、妖怪ファンが東京や埼玉など、遠方から駆けつけました。徳島三好市妖怪村から妖怪（8人）が来て、二日間妖怪行列に参加。沙界妖怪芸術祭を二日間開催したことで堺市内に宿泊し、山之口商店街近隣のお店を利用し、経済効果や市民との交流がありました。妖怪の故郷・岩手県遠野市からは資料提供と岩手県からの後援がありました。また読売新聞や朝日新聞（どちらも大阪府版）などが沙界妖怪芸術祭を事前に取り上げ集客につながり、アンケート結果からは堺市外の参加者は主にTwitterなどSNSからの情報入手が多いことがわかります。メディア、SNSなどを駆使した広報が集客につながりました。

市民参加型芸術活動（ワークショップなど）は、大人から子どもまで、お面づくり（22人）、妖怪かるた遊び（72人）など、世代を越えた交流も生まれました。

当日のパレードでは商店街の人たちが率先して交通整理を行うなどして、妖怪行列を支えて楽しんでくださった様子が主催者から報告されました。文化芸術による地域活性の取組といえるでしょう。（上田PD）

舞台芸術創造発信

伝統という共通点から生まれた、堺ならではの舞台

事業者 ジャワ舞踊の会

事業名 （仮題）幻視 in 堺 —能舞台に舞うジャワの夢—

日　程　令和3年10月23日　12:30-14:00、16:00-17:30

会　場　堺能楽会館

能舞台に照明が映える（写真提供：ジャワ舞踊の会　撮影：Hirokazu Tamura）

概　要　インドネシアのジャワ島中部の伝統舞踊とガムラン音楽の公演。単独舞踊や4人の四方舞、間狂言などがプログラムに組まれる。
上演時間90分、来場者数のべ86人。

執筆者所感

堺能楽会館は、雑居ビルの一角に入口があります。「この辺りのはず・・・」と思いながら会場を横切ってしまいそうでしたが、着物姿の方が何人かすっと入っていくのを見て気づきました。受付を済ませ奥へ進んでいくと大きな檜造の能舞台が現れ、その存在感に圧倒されました。舞台の上手にはたくさんのガムラン楽器が並んでおり、館主所蔵の南蛮屏風やオランダ船を描いた掛け軸なども舞台上に展示されています。アジアのお香もどこからともなく漂ってきて、異国の雰囲気を序盤から味わうことができました。

公演が始まると、1人のソロの踊り（単独舞踊『ガンビョン』）が始まりました。踊っておられるときの身体の重心の動かし方や足捌きは能と似た美しさを感じました。4人の踊り（スラカルタ宮廷舞踊（四方舞『スリンピ・ロボン』）は動きが一糸乱れず、腰にまいた長い布がさらさらとなびく様子が美しかったです。また、通常のジャワ舞踊は素足でパフォーマンスされますが、今回は演奏家も含め全員が足袋を履いておられたことも印象に残っています。

踊りだけではなく、新型コロナウイルス感染症の収束を願った詩の朗誦やジャワ出身のパフォーマー 2人による間狂言もありました。間狂言は2人が漫才のように掛け合いをしながら、堺の名物をめぐるという内容で、刀や自転車、お茶などが出てきました。

能舞台、ジャワ舞踊、いずれも伝統芸能という共通点があり、堺だからこそ実現したと感じる、絶妙にマッチした舞台公演でした。（川那辺PO）

文化芸術活動に関する相談受付・事業視察

文化芸術活動に関する相談・対話

文化芸術活動や補助金・助成金等に関するお困りごとについて、対面、電話、メールなどで相談・対話の機会を設けました。

<内訳>

○一般相談・堺市文化芸術活動応援補助金に関する相談の別（件）

一　般	7
補助金	35
合　計	**42**

○活動分野別（件）

音　楽	6
美　術	7
演　劇	2
舞　踊	2
伝統芸能	6
メディア芸術	1
その他	18
合　計	**42**

相談事例

Q 3つの団体で協働して事業を実施したいと思っています。会員の高齢化も進んでいるのですが活動の今後の展開をどのようにしていけばよいでしょうか。

A 3者の状況を話していただきながら、何が難しいのか、どのような条件が整えば事業実施が可能なのかを明らかにしていきました。決断は3者で実施されました。会員の高齢化については、活動の事業承継か終了かを考えていくことになります。活動に前向きでいらっしゃったので、活動のヒントになるよう、お住まいの近くにあるアートに取り組む障害者施設を紹介しました。

Q 子どもを対象にした事業を実施したいのですが、チラシで事業対象者のイメージをうまく伝えるにはどうすればよいでしょうか。

A 浴衣の着付けと茶道体験を行う事業について、参加者募集のためのチラシ案を拝見すると、イラストが女の子でした。事業の対象者を確認すると、性別関係なく参加してほしいとのことだったため男の子のイラストも追加したところ、当日は男の子の参加者も集まりました。

Q コロナ禍で会員が多数退会してしまいました。周年事業を準備しているのですがどのような内容がよいでしょうか。また会場のショッピングモールがコロナ禍で売り上げが落ち、例年のような会場費の助成をしてもらえないのですがどのように資金獲得をすればよいでしょうか。

A お話をお伺いするなかで、数年前に、会員が得意分野をいかし講座を開いたところ好評だったというくだりがあり、子どもや若者にもすそ野を広げる取組を提案しました。また堺市文化芸術活動応援補助金を紹介し、会員の発表会だけでなく多様な人たちが参画できる要素を加えた事業計画を検討してはどうかとお伝えしました。

Q 補助金申請は初めてなのですが、どうしたらよいでしょうか。

A お話を伺うと、目的ややりたいことははっきりされていました。子どもの貧困に心を寄せていらっしゃったことから、対話をする中で子ども食堂でワークショップを行うアイデアが出てきました。相談を終えた直後に、子ども食堂の活動を支援している社会福祉協議会へ相談に向かわれました。

文化芸術活動に関する相談受付・事業視察

文化芸術活動の視察・訪問

堺市文化芸術活動応援補助金の採択事業の視察に伺いました。実際に事業実施の現場に立ち会うことでコミュニケーションや対話が生まれました。事業の進捗をみつめ、計画書や報告書には書ききれない状況や想いに触れることもあります。

また、採択事業だけでなく、堺市内で文化芸術活動と協働したい企業や他ジャンルの方をお訪ねしました。意見交換をしながら、新しいアイデアや新しい関係性が生まれます。コロナ禍で出会いを持つことも難しい時期でしたが、時間のかかることだからこそ、オンラインやメールなども活用し、積極的に出会いの機会を設けました。

視察・訪問件数：41件

<内訳>

○一般視察・堺市文化芸術活動応援補助金採択事業視察の別（件）

一　　般	12
補 助 金	29
合　　計	**41**

○活動分野別（件）

音　　楽	8
美　　術	15
演　　劇	3
舞　　踊	2
伝 統 芸 能	2
茶　　道	1
そ の 他	10
合　　計	**41**

視察・訪問事例

事例 1

自治会主催の文化活動を視察した際に同じ地域のこども園と連携して、そこを会場として公演を実施している例がありました。このことは他の団体、施設との連携の身近な例として他の事業実施者へも示すことができますし、そのことが、その自治会の存在を広めることにもなります。また同じ視察の際に実施者から運営、活動資金のための相談を受け、改めて寄付を募るのは大変だが公演時に寄付金付き入場券（例：1,000円を本来の入場料、500円を寄付金とする1,500円券とする）を販売するなど具体例を助言しました。

事例 2

事業の視察に伺い代表者とお話する中で、今後の運営の方向性等その団体の代表者の方がひとりで抱えている問題についてお伺いすることが度々ありました。堺アーツカウンシルが実際に現場でお話をさせていただきそれぞれの思いを言語化することで改めてご自身の悩みや問題に気づくこともあります。そういった場合には、関係者を具体的に思い出してもらい、協力してくれそうな人に正直に話してみることをすすめました。

勉強会の開催

堺アーツカウンシルでは、地域でのアート活動について分かりやすく学び、交流する目的で「アーツマネジメント事始め」と題し、勉強会を2回実施しました。

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の流行などの理由により2回の実施に留まってしまいましたが、2回とも幅広い年代の方が参加してくださり、堺市内で活動されている方のお話を直接伺う機会にもなりました。

令和4年度は、よりテーマを細かく設定し、活動をどう他分野に広げていくのか、続けていけるかなどを一緒に解決していけるような勉強会や堺市内でさまざまな活動をされている方が気軽に参加してつながることができる交流会を企画する予定です。

第1回

テーマ　「地域とアート」の可能性
日　程　9月14日（火）18時～ 20時
会　場　オンライン開催
参加者　19名
内　容　PD、POがそれぞれ5つの事例を紹介しました。子ども、若者、食と交流、地域の居場所づくりなど、地域資源とアートをどのように結びつけていったのか、各自の経験を話しました。
参加者の1人からは、自分の楽しみとして絵画教室やバンドサークルに参加しているが、堺市文化芸術活動応援補助金の目的にある「社会的課題の解決」をどう取り入れていけばいいのかという質問がありました。上田PDは、「社会的課題に対する取り組みは、自分の楽しみからもう一歩足を伸ばしたところにある。絵画教室に地域の多様な人が参加できるようにするにはどうすればいいかというところを考えてみてほしい」と回答しました。
今回は1回目の開催ということもあり、堺市の文化芸術活動と深く関わるテーマでした。しかし、まだ浸透しているとはいえないと感じました。今後も同じテーマで参加者と対話を続けていきたいです。

第2回

テーマ　「地域とアート」実践への学び合い
日　程　10月14日（木）18時～ 20時
会　場　フェニーチェ堺　2階　多目的室
参加者　22名
内　容　会の前半は、第1回勉強会のアンケートで「どうやったら助成金の採択がもらえるのか教えてほしい」といった意見があり、また「令和4年度堺市文化芸術活動応援補助金」の申請時期が近づいていたため、申請書を書くポイントについて説明し、助成金を探すときのお役立ちサイトや、堺市の統計データを紹介しました。申請書を書くポイントの説明では、みなさん熱心に耳を傾けておられました。
後半は4グループに分かれ、PO、PDが1人ずつ各グループに入り、参加者自身の活動を紹介してもらい、活動を続けていくうえでの困り事などを話し合いました。話題は、運営方法、次世代継承、広報など多岐に渡り、参加者同士大きく共感しておられる場面もありました。勉強会終了後もあちこちで話が途絶えなかったことから、この勉強会が堺市内で活動されている方同士のネットワーク形成にもつながったと思います。

第2回「アーツマネジメント事始め」

広報

堺アーツカウンシルの活動を多くの方に分かりやすくお伝えするため、次の広報活動を行いました。

堺アーツカウンシル公式ホームページ（堺市ホームページ内）

URL：https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/bunka/art_katsudoshien/sakai_artscouncil/index.html
<掲載コンテンツ>
○堺市文化芸術活動応援補助金の申請・実施についてのお知らせ
○堺アーツカウンシル主催の勉強会・交流会のお知らせ
○プログラム・ディレクターのつれづれコラム　等

堺アーツカウンシル紹介リーフレット発行

リーフレット表

リーフレット裏

調査業務

地域の文化芸術環境の現状を把握し課題を収集・分析するため、「令和3年度堺市文化芸術活動応援補助金」採択事業への来場者、参加者を対象としたアンケートを作成し、調査及び分析を行いました。

○回答数
　887件

○調査項目
・回答者属性（性別、年代、在住地）
・来場理由
・満足度（企画の目的や内容、会場の広さや雰囲気、入場料・参加費、当日の運営や応対、総合的な満足度）
・企画趣旨が伝わったか
・堺アーツカウンシルの目的

○調査結果（別途堺市HP掲載）
　各調査項目のクロス集計を行い分析を加え、堺市の文化芸術環境を俯瞰的に捉えることができたことにより、令和4年度以降の相談受付や伴走支援において、より丁寧に助言を行うべき部分を改めて認識することができました。
　また、各採択事業についても個別に各調査項目のクロス集計を行い分析を加えることで、個々の事業が抱える問題点や課題が明確な数値に基づいて明らかとなった結果、事業者からの相談に対してもより精度の高いアドバイスを実施することができるようになりました。

座談会―令和3年度の活動を振り返って―

令和4年度から新たに就任した大澤POも加わり、令和3年度の堺アーツカウンシルの活動を振り返りました。

座談会メンバー

プログラム・ディレクター（PD）　上　田　假奈代
プログラム・オフィサー（PO）　大　澤　寅　雄
　柿　塚　拓　真
　川那辺　香　乃
　中　脇　健　児
　宮　浦　宜　子

●令和3年度の活動について―

大澤PO：令和3年度の堺アーツカウンシル（以下「堺ACJ」）の活動を、それぞれプログラム・ディレクター（以下「PDJ」）、プログラム･オフィサー（以下「POJ」）の立ち位置から振り返ってみましょうか。

中脇PO：アーツカウンシルというと評価（審査）の公平性を保つための機関って印象だったんですけど、堺ACは“伴奏支援”、“社会包摂”って言葉があって、よそ者がいきなり入って、堺での活動とどう関わるかは、結構手探りしながらやってきました。それが各々で見えてきた1年だったという気がしています。

川那辺PO：活動の初年度で手探りだったということ、コロナのせいで採択事業や堺AC主催の勉強会等がオンラインでの開催になったこともあって、堺に直接来る機会が少なかったのは反省点です。その中でも何件か調査、視察としてお伺いさせてもらったのですが、堺は面白い街だなって思いました。ビルの中に能楽堂があったり、熱い思いを持って子どもと向き合って絵画教室をされている方がいたり、そこに共感や意気投合できて、2年目はもっとそういう人と出会っていきたいなと思いました。

宮浦PO：新設の組織で、運営自体が試行錯誤。堺市内の活動のこともまだ見えていなくて、模索しながらの1年でした。だから、それぞれの専門分野の中で、できる範囲で対応してきました。その中で堺市とか、市民の姿が見えてきて、何をどうしていけばいいのか少しずつ分かってきました。PD、POがそれぞれに得意なことも見えてきたし、市内でこんな事業が続いてきたんだと驚いたこともありました。関わりが増えることで、双方に発見があり、学び合えると実感しています。

柿塚PO：例えば、オーケストラのコンサート。それは堺でも、東京でも、ドイツでも舞台の上でやることは一緒。それをどうやって地域の視点からアドバイスしたり、協力したりできることがないかということを考えているんです。“地域文化力”ってどういうことなのか、“社会包摂”って言われても舞台での活動とはなかなか結びつかない。難しいですけど、それを市民の活動でどう進めていくのかとすごく考えます。

大澤PO：僕はPOとしては令和4年度からの着任ですけど、令和3年度は調査研究事業に携わっていました。昨年度はオンラインを中心にやり取りやミーティングをして、文化課の職員も含めてアンケートの調査設計をどのようにするかということから一緒に議論ができて、これから堺ACでやろうとしていることに対して、どういう情報を集めれば、成果や課題を把握できるかっていう基本的な指標を作りました。PD、POのそれぞれの専門性がありつつ、その共通言語を一緒に作ることで、堺ACのスタートに立ち会えたことが嬉しかったです。

撮影：成田舞

上田PD：もうほんとに頼りないPDで皆さんに助けられた1年でした。ありがとうございます。個人的な立場から、私自身が2007年から大阪にアーツカウンシルを作るっていう運動をしてきましたが、

自分がアーツカウンシルとして活動することはイメージしていませんでした。いざ実際に堺ACの中にいると、本当に難しいということを実感しています。私は20年間現場にいて、今は中間支援組織として行政と現場の間に立つことで、自分がこれまでやってきたのは調整ではなくて、単に行政へのお願いだったんだと気付きました。困っているからなんとかお願いしますと伝えることを提言だと思っていたのですが、そうではなかった。振り返るといつも私自身、活動するときに“人”にずっと支えてもらっていて、アーツカウンシルもきっと“人”なんだと思ってます。私は大阪ですから隣町が堺市なんです。だから、堺市で活動している人はすぐそばにいる感覚。他の関西の都市と比べても堺市はユニークだと思います。堺市から大阪市に出ていく人、堺で頑張りたいと思っている人の交流の橋渡しのような役割ができると面白いと思いました。積極的に視察に出かける中で、文化会館に立派な陶芸の窯があることにびっくりしました。さすが茶の湯の条例のある街！ また堺ACは市民の学びや出会いの場としての勉強会や交流会は主催していますが、市民向けのワークショップや鑑賞プログラムのような事業は実施していないので、地域文化会館の職員、つまり市民の方の表現活動に出会う最前線の職員の意識が向上すると良くなるんじゃないかということで地域文化会館の職員向けの研修を行いました。地道なことを頑張ったと思います。それから公益財団法人堺市文化振興財団も、変革の中で新しい人材も増えました。堺ACとしても、月に1,2回は丁寧にミーティングを持ちました。

●堺市の文化的特徴―

大澤PO：堺市の文化的な特徴について、例えば文化的な環境や活動内容、市民の気質など、気付いたところを教えていただけませんか。

川那辺PO：やはり伝統芸能やお茶は多いと思います。能楽堂が港の近くにあったり、ある小学校の壁に南蛮人の絵が描いてあって、海外の風というか、そういういい風が吹く感じの街だなと感じることがありますね。多様性というか、伝統があるのだけど、新しいことにもチャレンジしてみたいっていう人たちも一定数いて、それがうまく混ざろうとしている感じがします。

柿塚PO：ユニークな自治会がありました。文化活動も含めて自分たちの自治会は、自分たちでやるんだと頑張っていて。寄付を集めたり、こども園と連携して公演を企画したり。

上田PD：面白かったのが、自治会の企画に若いアーティストに来てもらったら、そのアーティストに育ってもらえるという風に表現されていましたね。

柿塚PO：自分たちがずっと続けてきた事業に誇りを持っているし、地域の人の目も肥えている。自治力とそのプライドみたいなものを感じました。

中脇PO：僕は以前に堺のまちづくり会社のタウンマネージャーを1年間していたことがあるんですが、日本全体の歴史にダイレクトに堺の歴史が繋がっているなと思います。一方で、新しい産業、堺発で全国の企業になったとか。その混ざっている感じ、現在と過去が横糸と縦糸のように、しかもそれが層になっていて3D（立体）で面白い。だからこそ糸口があり過ぎて難しいという面もある。

宮浦PO：補助金に申請された事業の分野を見てみると、音楽の次に伝統芸能が多いです。確かに、事業で取り上げられる自分たちの街の歴史が日本の歴史として全国の誰もが知っているというものが多くて、そういう資源がたくさんある。これが別の街だったら、こんなに有名な歴史は入ってこないのだろうなっていうのは感じます。

●「堺市文化芸術活動応援補助金」の成果と課題―

大澤PO：「令和3年度堺市文化芸術活動応援補助金」の成果と課題について。初年度ですから何が成果で何が課題か言い切ることが難しいかもしれないけれども、その中でも1年間やってみて見えてきたものを共有しましょう。

中脇PO：「スタートアップ支援事業」と「舞台芸術創造発信事業」については、他の自治体の補助金でも同じような内容のものを見かけます。一方で、堺市が社会包摂に重きを置くときにその中間の制度をどのように作るかがポイントになると思います。「地域文化力向上事業」は、歴史や伝統など堺には資源がたくさんある。一方で、地域性より個別性にもうちょっとリーチできないか。私はここに住んで生まれ育ったけど、その中で違和感や課題を感じることを広げていくようなことなのではないかと思っています。

宮浦PO：この補助金制度によって、これまで見えにくかった市内の活動が可視化されたのは大きいと思います。特に「地域文化力向上事業」の区分では、長く事業を続けてきた申請団体も多かったし、実際に視察に行くと、申請書から読み取れる以上の豊かな事業もありました。また、補助金に採択されたことで自分たちの事業の公益性を意識したという事業者もいた。ただ、補助金を活用したくても自らの活動には活用しにくいと感じて、令和4年度は申請を見送った採択事業者もおり、課題もあると感じました。

川那辺PO：補助を受けて事業をすることが1年目だったという印象です。堺ACが採択後もかなりコミットすることに違和感を持った事業者もいたと思います。反対にこんなに助けてくれるのって思った方もいただろうと思います。申請書の段階でも事業の見せ方、言葉の選び方など事前に申請者と堺ACで相談できれば更に補助制度に沿うように書けるのではということもありました。

柿塚PO：堺の補助金は、事業の視察に来るとか募集の段階で文化や芸術以外の視点を求められるとか、少し面倒なところもあります。でもこれがスタート地点でこれが堺の基準点になるのだから、お互いに緊張感があっていいと思います。また書面だけでは判断しにくい、この事業は面白いかもしれない、その反対で立派なことが書いてあるけど実現性はあるのかなど、そのあたりPD、POは細かく捉えることができる経験の持ち主。令和3年度の申請書と報告書を見て、令和4年度の申請書は様式を変えました。書類を埋めることで事業者の頭の中が整理できて事業の目的と内容が明確になるような様式となったと思います。

上田PD：PD、POが補助金審査には直接かかわらないからこそ、相談を受けたり、コミュニケーションを大事にしているのが特徴と言えると思います。

大澤PO：事業者に対する相談、助言を行う一方で、堺ACの中間支援の役割としては、行政に対する助言や働きかけも求められると思います。そこからの制度設計や運用面の改善は何かありますか。

川那辺PO：令和4年度から補助対象経費の謝金の範囲が狭くなりました。「スタートアップ支援事業」のような小さい規模の事業はやりにくいという声を聞きます。

宮浦PO：公的な補助金制度に制約があるのは当然だけれど、この補助金制度がめざす共生社会とか他分野と協働する際に工夫が必要なものもあると実感しています。狭義の芸術や文化の枠では想定されないお金の使い方、事業の進め方が出てくることもあるためです。また、補助率が1/2であることで、申請をためらう団体があることも見えてきています。簡単に解決できることではないですが、他の自治体の類似の制度などを堺ACが調査して、市に提案していくことも必要かもしれません。

大澤PO：堺市が文化芸術振興で掲げる目的実現に近づくように、市民にも行政にも堺ACが提案し、意見を言い続けることが重要ですよね。

中脇PO:市民から行政に直接伝えにくいことでもPD、POが間に入ることで建設的に伝わるし、現場を知っている専門家として市民とも対話できます。

上田PD：採択事業の一方で不採択事業も同じくらい大切にしたいと思っています。堺市からの採択結

果を受けて、不採択となった事業には結果通知のときに、堺ACから、事業内容のうち改善を期待する部分について併せてコメントをお送りしています。また採択者には実績報告書を提出してもらった後にコメントを送り、細かいコミュニケーションを積み重ねて来ました。公募型補助の課題を少しでも解消したいと思っています。

中脇PO：堺市の規模が、各事業を丁寧に見ることができる一番大きな範囲のような気がしますね。これ以上規模が大きくなってしまうと、各事業を丁寧に見ることが難しくなってしまうと思います。

●令和4年度に向けて―

大澤PO：最後に令和4年度以降に向けた目標や、PD、POとして取り組みたいことをお話しましょう。

柿塚PO：社会包摂と言った時に現実味のある言葉として想像し、どう事業に落とし込めるか一緒に見つけていきたいと思います。もう一つはどこまで地域にこだわるのかということ。むしろ地域を越えることに意味がある文化や芸術もあるので。堺市は広いから例えばフェニーチェ堺に行くのも地域外に出かけて行くという意識の人もいるはずなので。

宮浦PO：市民のみなさんに、堺ACを頼りにしてもらえる状況をつくるためには、まずは、堺ACの存在を知ってもらい、私たちにできること、やっていることを伝えていく必要があります。情報発信の担当として、ニュースレターの発行や、ホームページ、Twitterでの発信を通して、まだ対面できていない市民の方たちへのコミュニケーション量を増やしていきたいです。

川那辺PO：堺ACのことをよそ者と思う方もきっといると思います。できるだけ顔を出して出かけていって直接話せる機会を作りたいです。一緒に盛り上げるということを伝えたいと思っています。

中脇PO：僕はアウトリーチや社会包摂型のプログラムをどう組み立てるかを学ぶ市の文化施設の担当者向けの研修を担当しています。自治体の文化施設の職員をしていたこともあるので各地域の文化施設の職員が経験や知見を持つことが、地域の資源になると思っています。地域の人が近所の文化施設に相談に来ることができる状況がいいですよね。

宮浦PO：勉強会については、令和4年度は参加者の活動の底上げや体力づくりに役立つような学びの場をめざしていくことになりました。市内で活動する人たちの出会いの場である交流会も同時に行っていくことで、いろいろなニーズに応えていきたいです。

大澤PO：調査研究担当のPOとしては、令和3年度の調査結果は、今後の調査の水準線として捉えることもできるだろうと思います。令和4年度以降に向けて、比較の対象ができたということ。初年度を水準としたときに、変化や推移を提示することで、堺AC、行政、事業者に対して堺市のめざす方向に向かっているのかどうかを共有していきたい。3年目以降に続く道筋を、2年目で提示できるといいなと思います。

上田PD：令和3年度に手がけ始めたことが形になりつつあると思います。地域文化会館向けの研修が堺ACのモデル事業に繋がったり、視察レポートを書き溜めていたものがニュースレターとして発信されることになったり、Twitterでの広報も始まり堺ACの活動が見えるようになってきました。勉強会に加えて、“さかいとあーと井戸端かいぎ”というゆるやかな集まりを作って、新しい繋がりづくりも始めます。大阪府市にもアーツカウンシルがあり、大阪府の中に堺市がある。それぞれのPD、POの特徴と現場感のある人たちで構成されている堺ACだからこそ地域版アーツカウンシルのモデルになるかもしれないと思って続けていきたいです。

令和3(2021)年度　堺アーツカウンシル　活動報告書
2022年10月発行

<発　　行>　堺アーツカウンシル（堺市文化課）
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3-1
TEL　072(228)7143
FAX　072(228)8174
MAIL　bunka@city.sakai.lg.jp
<デザイン>　株式会社松岡印刷所

文化庁
令和4年度文化芸術創造拠点形成事業補助金採択事業